

べっそこよう
別唄古窯群

所在地 大府市共和町地内
(北緯35度3分2秒 東経136度56分27秒)
調査理由 内陸用地造成事業「大府木の山地区」
調査期間 平成22年4月～7月
調査面積 1200㎡
担当者 池本正明・石井香代子



調査地点 (1/2.5万「鳴海」)

調査の経過 今回の調査地では愛知県企業庁が工業団地造成を予定しており、埋蔵文化財調査センターの調整のもと、愛知県埋蔵文化財センターが調査を実施した。当地は以前から窯体の一部が露出し、遺物が散布する場所であった。愛知県遺跡分布地図にもここに2基の窯跡があることが記されている。2009年度の試掘調査で窯体が少なくとも2基、さらに灰原が広がっていることが確認されたため、今回の本調査を行うことになった。調査期間は平成22年4月から7月までである。

立地と環境 別唄古窯群は知多半島の根元の丘陵地帯の南西斜面に構築されていた。この地域の丘陵地帯は多くの窯が築かれたところであり、別唄はちょうど猿投窯の南限と、知多古窯群の分布北限が接するあたりに当たる。先述の分布地図では別唄地内、今調査地から少し離れた場所に他にも窯跡があったことが記されているが、現在は失われている。

窯体以外の中世の遺跡では西400mに弥生時代からの複合遺跡である子安神社遺跡が立地しており、中世陶器が出土しているが、それ以外の顕著な遺跡はいまのところ確認されていない。

調査の概要 調査地の周辺は伊勢湾岸自動車道や名古屋高速が走り、土地の改変が進んでいる。窯跡のある丘陵斜面も元はさらに上まで続いていたが、現在は削平されている。調査地内も東西、南北ともに攪乱が深く入っていたが、幸い、窯跡を検出した地区は台状に掘り残されていた。調査はここを中心として1200㎡で実施した。

調査の結果、試掘で確認した2基に加えあらたに1基、計3基の窯体とこれらの窯体に伴う灰原を検出した。

001SY 001SYは最も北に位置する窯体で、天井部分は焼成室の一部しか残っていなかったが、煙道部端から排水溝までを検出した。焚口から煙道端までの全長は約11mをはかる。

焼成室は中程が膨らみ、最大幅約2.6mであった。床面には焼台痕が残る。床面は多いところで5回の貼り直しが見られ、複数回にわたる使用を示していた。下方1/3ほどには床面下に隙間無く伏せた山茶碗を検出している。

燃焼室には隣の002SYで出たとみられる灰層が流れ込んでおり、002SYよりも古いことが知られる。出土遺物は山茶碗と小碗がほとんどを占めていた。

この窯体の前庭部周付近で浅い土坑を検出しており、001SYに伴う遺構とみられる。

002SY 3基の窯体の中で最も高い位置に築かれた窯体である。煙道部は造成のために途中で切断されており、この部分が地表に表出していた。

煙道部以外の残りは非常に良く、焼成室の天井部分はほぼ完全に残っていた。窯体内部も分焰柱近くから上端にかけての側壁近くでは、原位置を保ったままの焼台が多数残っていた。床面下には001SYと同様、伏せて並べられた山茶碗を検出している。002SYの検出長は燃焼室から煙道途中まで約8.4m、最大幅は約2.5mをはかる。

前庭部は数層の整地層があり、また窯壁や床の貼り直しが確認できるなど数次にわたる

利用が認められる。窯の周辺では、前庭部左右に土坑と、燃焼室端あたりから伸びる溝を検出している。後者は位置的に排水溝の可能性はある。

窯からの出土遺物は001SYと同じく山茶碗と小碗がほとんどを占めていた。

003SY 後世の攪乱によって地山まで削られた場所に、かろうじて分焰柱と燃焼室、焼成室の一部が残っていた。平面形は001SYに似て、分焰柱から焼成室にかけて胴が張っている。床面に補修の貼り直しが見られるが、床面下施設はなかった。検出長は約5.9m、検出最大幅は約2.5mをはかる。

灰 原 001SYと002SYの下に広がる灰原を数層検出している。検出位置からこれら2基の窯体に属すると考えられるが、今後、灰原検出遺物や位置の検討が必要である。

そ の 他 001SYの上で素掘りの野井戸(006SE)を検出している。検出面での直径約0.8m、崩落の危険があるため完掘できなかったが、2.2m以上の深さがある。遺物は出土していない。この他、いくつかの小規模な土坑を検出しているが、窯体に伴うものとは考えにくい。

出 土 遺 物 遺物は前述のように、製品では山茶碗と小碗、小皿がほとんどを占めている。灰原からは陶丸、片口、鉢の破片も少数出土している。その他に多数の焼台や障壁片とみられる幾層にも重なった粘度塊が溶着した破片が出土している。

窯体関連以外の遺物は弥生土器片、石鏃片が包含層から数点出土した。

ま と め 今回の調査では主に山茶碗を焼いていた窯体を3基、それらの窯体を起源とする灰原を検出した。各々の窯体から出土した遺物から、操業順序は001SYまたは003SY→002SYと考えられ、12世紀後半～13世紀初頭の年代が与えられる。001SY、002SYの2基では、それぞれ床面下施設を検出している。碗の設置や配置面積などに違いがあり、これが時期差によるものか、窯体の構造に起因するものかなど、今後の検討課題であろう。(石井香代子)



調査区全景



001SY 最終面



001SY 床面下施設



001SY 床面下施設拡大



002SY 最終面



002SY 床面下施設



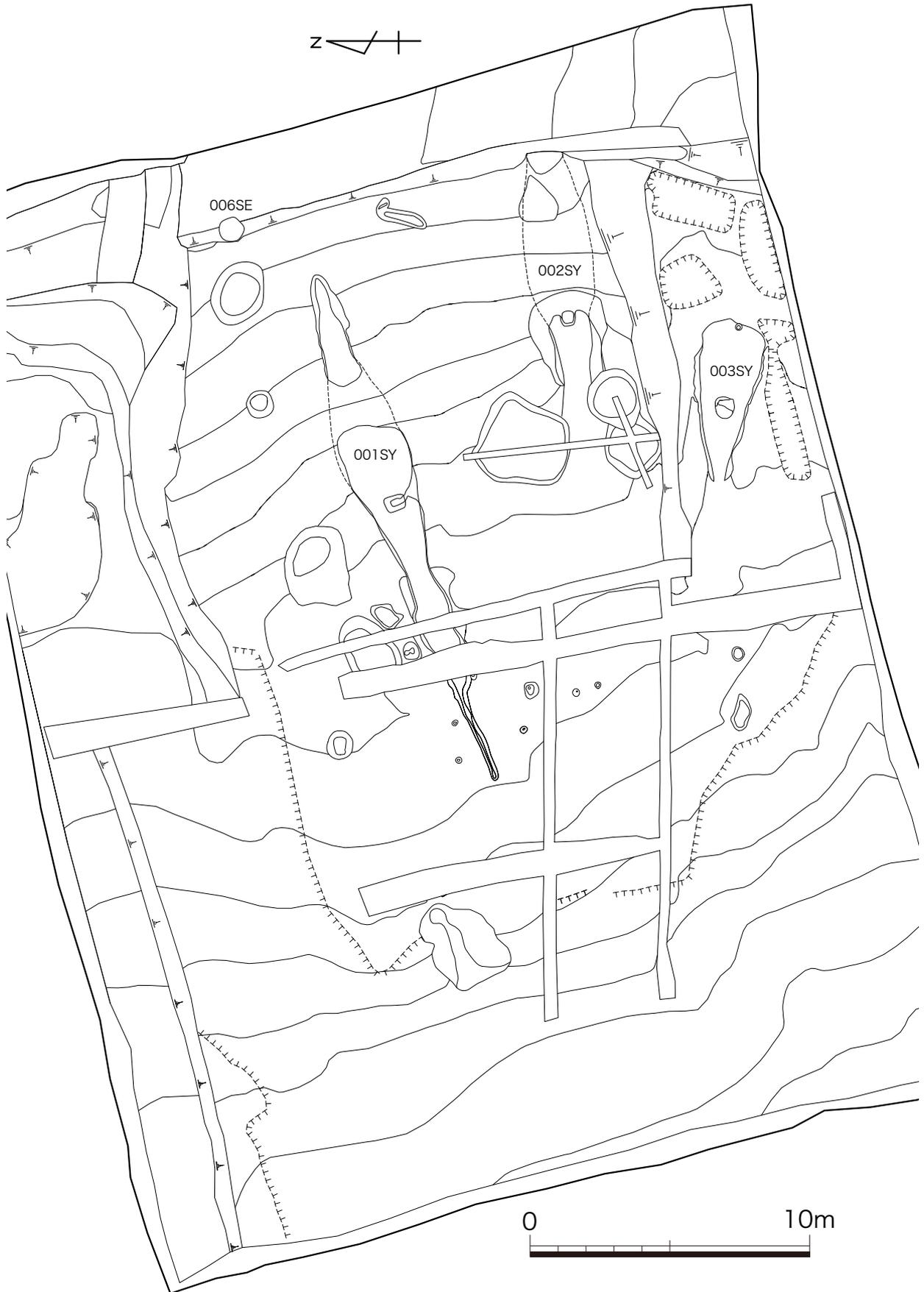
002SY 床面下施設拡大



003SY 最終面



002SY 前庭部灰原検出状況



別岨古窯遺構全体図(1:200)